

ふれあい



「秋葉大権現」と刻した石灯ろう

聞こえてきそうである。台ヶ原の郵便局を少し過ぎた右側には「名道百選の碑」があり、その先に田中・荒尾神社がある。神社への階段を上ると境内に相撲の土俵が作られている。地元の人に尋ねると毎年秋に子供相撲が開かれるとのことだ。また、この神社には県内ではここだけに存在する虎頭の舞があり、秋祭りに披露される。神社入口の解説板には、この神社が江戸時代のお茶壺道中の宿であったことも記されていた。神社をあとにして上り坂となった旧道を歩いていくと、左手の家並みの間から甲斐駒ヶ岳が見える

右折した旧道は史跡こそ少ないが、両側の家並みが街道の雰囲気を感じさせてくれている。家並みが途絶えてくると、旧道は下り坂となり水田の間を通る道となる。右には七里岩、左に南アルプス、水田を渡る風が心地よく通り過ぎていく。しばらく歩くと旧道は前沢の集落に入る。まっすぐ続く道の右にグラウンドがあり、その中には白須松原の址碑がある。碑には昔この地に四キロメートルにもわたりす



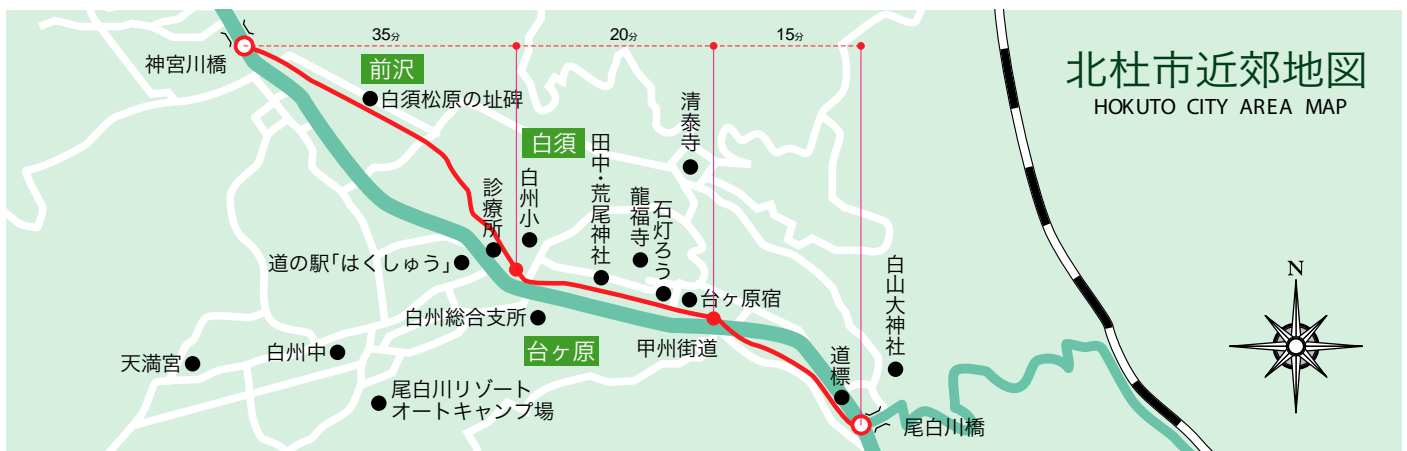
昔の面影を残す台ヶ原宿の町並み

ことに気付く。台ヶ原宿を過ぎ白須の集落へと旧道は入って行き、国道二十号に合流する手前を旧道は右に曲がる。台ヶ原宿の入口からここまでは、歩いて約二十分程度の行程であった。



名道百選の碑

ばらしい松林があったことと、後醍醐天皇の皇子宗良親王が詠んだ歌碑が紹介されている。その当時の松の木かどうかは分からないが、所々にある松を見ながら歩くと、旧道は前沢の集落を抜けて神宮川橋で国道二十号に合流する。旧甲州街道はこの先にある甲州最西端の宿である教来石へと続き、やがて国界橋を渡り信濃の国へと入り、高木・金沢・上諏訪の宿を経て、中山道へと続いて行く。



山梨の旧道を訪ねて

一道一会

北杜市 / 甲州街道(台ヶ原宿)

休日には名水を求める人々でにぎわう国道20号沿いの道の駅「はくしゅう」甲州街道「台ヶ原宿」は、そんな喧噪から少し離れた旧道沿いに、静かにたたずんで

宿 場の面影をよく残している道として、日本の道百選に選ばれた甲州街道台ヶ原宿を尾白川橋のたもとから神宮川橋まで歩いてみた。尾白川橋を渡ったところから左手に入っていく道が甲州街道の旧道である。入口は細い農道のように分かりづらいが、数メートル入った所に旧甲州街道の手書きの看板があり、旧道であることを教えてくれている。五十メートル程歩くと「右かうふみち 左はらみち」と刻された道標に出会う。この道標は旧甲州街道が釜無川沿いを通り、甲府へ続く「かわじ(河路)」と、七里岩台地上を通る「はらじ(原路)」の二つの道があったことを今に伝えている。当時、平坦な釜無川沿いの道が日常使われていたが、釜無川が洪水で氾濫したときには「はらじ」と言われた七里岩台地上の道を使っていたようである。十五分程で旧道は現在の国道二十号の台ヶ原下交差点に出る。交差点には台ヶ原宿の表示板があり、左右に進めば現在の甲州街道である国道二十号、直進すれば台ヶ原宿に入る。

国道の喧噪から離れて、宿の中へと足を進めて行くと、新しい家並のなかに残る往時のたたずまいが郷愁を誘い思わず足を止めさせる。宿の中は標識や案内板がよく整備され、当時の様子を解説している。五分程歩くと本陣跡の標識があり、「秋葉大権現」と刻した石灯ろうが建っている。御影石を使って作られた石灯ろうは、昔、この地区に火災が続いたため防火を祈願して建てられたようである。このあたりが宿の中心になるのだろうか、昔の面影が色濃く残っており、古い建物の軒下を借りて一休みすれば、いにしえの旅人が旅を急ぐ足音や、馬のひづめの音が



「右かうふみち 左はらみち」と刻された道標